

第51回新潟内分泌代謝同好会

日時 平成元年7月8日(土)
午後2時開会
会場 新潟厚生年金会館

一般演題

1) 食物繊維の膨化と結合

上田 春男・山田 幸男(信楽園病院)

〔目的〕食物繊維(以下 DF と略す)の働きは、水分を吸収し体積を増す膨化と、腸内物質を吸着する結合に大別される。

今回我々は、DF の胃と十二指腸における膨化の違い及び、蛋白質や糖の DF への結合について検討したので報告する。

〔方法〕検討は試験管内で行ない、胃の中を想定して酸性溶液、十二指腸及びその他の小腸を想定して中性溶液を用いて DF を溶解し、37℃で1時間反応させた。結合については、¹²⁵I アルブミンやオートアナライザー法により検討した。蛋白質はウシ血清アルブミン、糖はグルコースを使用した。DF は、アルギン酸 Na など18種類の精製されたものを使用した。

〔結果〕胃の中では、DF 単独よりも蛋白質と共に摂取した方が膨化が大きく、十二指腸などの小腸では、蛋白質の DF の膨化に与える影響は少ないと考えられる。そして、胃で膨化された DF は、その後も一定の体積を維持するだけでなく、十二指腸へ運ばれると膨化したものの体積が減少すると思われる。

結合についても蛋白質の DF への結合は、胃の中においてより著しいと思われる。

糖については、膨化・結合において DF とは無関係な結果が得られた。

2) VIP 産生腫瘍に対する α -インターフェロンの効果

五十嵐一雅・他内分泌班一同(新潟大学 第一内科)

脾臓に原発し発見時既に肝への遠隔転移を認めた VIP 産生腫瘍の一例である。症例は38歳男性。昭和61年8月下痢が出現。血中 VIP 濃度は1900pg/ml と高値であったため上症と診断し翌年1月脾尾部、脾臓、肝左葉の一部を切除。約1年間無症状であったが昭和63年3月再発。

血中 VIP 濃度も1400pg/ml と高く肝に多発性転移を認めた。ソマトスタチン誘導体(SMS)の投与により血中 VIP 濃度は410pg/ml に低下し症状は改善した。しかし SMS の増量により escape 現象が出現。SMS の投与量及び投与回数の変更により再度効果が現れ退院可能となった。しかし約1年後に SMS に対する抵抗性が出現し平成1年4月再入院。血中 VIP 濃度は170 pg/ml と抑制されており転移巣の増大も認められなかった。SMS に加え α -インターフェロンを併用したところ3日目から効果が現れたが1週間しか持続しなかった。その原因は不明であるが、長期間有効との報告もあることから今後試みてよい治療法ではないかと考えられる。

3) 高血圧の既往を有したバーター症候群(軽症型)と思われる1例

金子 兼三(長岡赤十字病院 内科)

症例は41才男。若い頃より肥満。28才より高血圧でトリアムテレン(T)内服。昭60.7 T中止後タニール、低K血症周期性四肢麻痺発症。以後62.2までアルダクトン内服。62.4 PRA 4.6ng/ml/h, PAC 171 pg/ml と高値。63.9 大腿部筋痛出現。近医より低K血症、高血圧に対してK剤、polythiazide(PT)投与されたが症状の改善なく、63.12 当院に入院。身長172cm、体重77kg。大腿部内側にピリピリする痛みあり。検査成績では①血清 K 2.4mEq/L で、PT 中止、塩分制限、K剤投与で正常化。②血圧は入院後ほとんど正常。③ACTH・コーチゾール系検査よりクッシング症候群は否定。④フロセמיד立位試験(PT中止11日目)でPRA 4.2→10.4, PAC 141→324 と共に高値、高反応。⑤腎生検でJGAの軽度腫大あり。⑥distal fractional chloride reabsorption: 0.61 と低値。⑦血清K正常化後のA II およびノルアドレナリンの昇圧試験正常。以上より本例は Bartter 症候群の軽症型と考えられ、時々の血圧上昇には肥満の関与が考えられる。

4) 当科での体外受精・胚移植

—30例の妊娠例分析より—

佐藤 芳昭・荒川 修
谷 啓光・織田 和哉(新潟大学 産婦人科)
七里 和良・三宅 崇雄

新大産婦人科での体外受精・胚移植の成績について検討した。対象の多くは卵管因子であり、男性不妊、原因不明不妊症がこれに引きつづいている。採卵率は83%で